

母リベカの里に逃げて行く次男ヤコブは、小さい時から「穏やかな人で天幕の周りで働くのを常とした」と記され、野を駆け回っていた兄とは全く違います。兄に対する恐怖から逃れるだけでなく、見知らぬ遠い旅路は不安と苦難で一杯だったことでしょう。とある場所で一夜を過ごすことになった時、彼は夢を見たのです。天使の上り下りする階段で、「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る」と告げる神の姿を見たのです。ヤコブは恐れおののくとともに、神に従う誓願を立てました。

やがて母の兄ラバンの里に近づくと、井戸辺で一休みしました。大勢の羊飼いが羊をそこに集めていました。偶然にも、ラバンの娘ラケルも羊を連れてそこにやってきました。大きな石で井戸を塞いで守っていたので、ヤコブはすぐに石を転がして、水を飲ませてやるのです。母リベカの若い日を彷彿とさせます。ヤコブはラケルが親族と知って、安心と喜びでラケルに口づけし、泣いてしまうのです。



ラケル像 John Thomas (1813-1862)

優しい、力持ちの男が親族ヤコブと知って、また、自分に心を許して泣いたことで、ラケルはすぐに恋心をいだいたことでしょう。ヤコブも愛し、父ラバンに7年間の労働条件を申し出て、ラケルとの結婚を許してもらいます。長い年数ですが、恋する二人にとって、「ほんの数日のように思われた」とあります。

7年の年季が明けていよいよラケルと結婚できると喜んだら、ラバンは「姉が先だ」とラケルの姉のレアを差し出すのです。レアはヤコブが働き者であることを知っているので、満足したでしょう。騙されたヤコブはもう7年ラケルの為に働く羽目になります。争いごとのできないヤコブはそれを受け止めざるをえませんでした。

愛するヤコブを姉に奪われたラケルの悔しさはどんなだったでしょう。ラケルはいつも姉を優先し、姉のお下がりでも我慢する妹の立場です。それはいつも負けの立場です。けれどもヤコブを愛し愛されているという揺るがない自信はありました。姉レアは堂々と4人の男子を産みます。ところがラケルには子どもができません。それも悔しいことでした。自分の奴隷を差し出して子どもを得て、「姉と死にもの狂いの争いをして、ついに勝った」と言います。現実はまだ、負けているのです。レアは更に子どもを産みます。ラケルはなんとか、姉から「妊娠特効薬(?)」の恋なすびを貰い、姉にヤコブとの一夜を譲ります。レアはなんとヤコブに「あなたを雇ったのです」と言って、愛する関係ではなく、主従関係でヤコブと交わる場面も記されています。壮絶な葛藤を姉妹で繰り広げるのです。けれども最後にラケルにも待望の男子が与えられました。

20年の労働の後、ヤコブは父母の元に帰るとラバンに申し出ますが、ラバンは貴重な労働力が惜しくて、なかなか許しません。とうとうヤコブは家族、財産を持って脱走しました。その時、ラケルは父ラバンの守り神を盗んできたのです。ラバンはそれを探することを口実にヤコブを追跡、糾弾します。何も知らないヤコブは「私に何の罪があるのですか。もしあなたの家の物が一つでもあったら裁いてもらいましょう」と堂々とラバンと対決します。いくら探しても守り神は見つかりません。愛するヤコブを、結婚で騙し、さんざんこき使う父を、ラケルは許せませんでした。守り神をお尻の下に置いて、「お父さん、悪く思わないでください。私は月のものがあるので立てません」と父を騙したのです。父ラバンはヤコブに謝らなければならない立場に逆転します。このおかげで、ヤコブは故郷へ、兄エサウへの土産を持って、帰ることができました。ラケルはヤコブを勝たせたかったのです。彼への愛は、父を裏切ってもよいほどのひたすらな恋でした。